**聖霊降臨節第５主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2024年６月16日**

**「失敗者が用いられる」**

**出エジプト記４章14～17節**

 **4:14 主はついに、モーセに向かって怒りを発して言われた。「あなたにはレビ人アロンという兄弟がいるではないか。わたしは彼が雄弁なことを知っている。その彼が今、あなたに会おうとして、こちらに向かっている。あなたに会ったら、心から喜ぶであろう。**

 **4:15 彼によく話し、語るべき言葉を彼の口に託すがよい。わたしはあなたの口と共にあり、また彼の口と共にあって、あなたたちのなすべきことを教えよう。**

 **4:16 彼はあなたに代わって民に語る。彼はあなたの口となり、あなたは彼に対して神の代わりとなる。**

 **4:17 あなたはこの杖を手に取って、しるしを行うがよい。」**

**使徒言行録15章36～41節**

**15:36 数日の後、パウロはバルナバに言った。「さあ、前に主の言葉を宣べ伝えたすべての町へもう一度行って兄弟たちを訪問し、どのようにしているかを見て来ようではないか。」**

 **15:37 バルナバは、マルコと呼ばれるヨハネも連れて行きたいと思った。**

 **15:38 しかしパウロは、前にパンフィリア州で自分たちから離れ、宣教に一緒に行かなかったような者は、連れて行くべきでないと考えた。**

 **15:39 そこで、意見が激しく衝突し、彼らはついに別行動をとるようになって、バルナバはマルコを連れてキプロス島へ向かって船出したが、**

 **15:40 一方、パウロはシラスを選び、兄弟たちから主の恵みにゆだねられて、出発した。**

 **15:41 そして、シリア州やキリキア州を回って教会を力づけた。**

**みなさんは今朝起きてから何か失敗をしましたでしょうか。唐突にそんなことを聞かれても困ると思いますが、私たちは日々の歩みの中で大なり小なりの失敗をしてしまうものです。**

**昔からのことわざに「失敗は成功のもと」「失敗は成功の母」というものがあり、私のこの失敗は無駄ではないと思いつつも、やはり私たちは失敗することで周りの目が気になったり、自分の評価が下がることを心配してしまいます。失敗を重ねることで「役に立たない人」「使い物にならない人」と判断されることを恐れてしまい、ついつい過度に頑張ってしまったり、失敗を恐れるあまり失敗しないように失敗しないようにと気持ちや行動が小さくなってしまうというのも正直なところではないかと思います。**

**いつのころからか日本は「不寛容な社会」と言われるようになりました。日本だけではないと思いますが、人の失敗や欠点をおおらかに認めるよりも、それを厳しく指摘することで自分は正しい人間になっていると思って日頃のストレスを発散するのです。政治家や芸能人が問題ある発言をしたらすぐにSNSが炎上してたたかれます。もっとおおらかな気持ちでお互いに受け止めればいいのにと思うのですが、社会全体がなんとなくギスギスして失敗が許されない世の中になってきているように思います。**

**そして、その考え方というのは残念ながら教会にも持ち込まれているように思います。神様は日々数々の失敗をしてしまう私たちをどのようにご覧になられているのでしょうか。共に御言葉に聞いていきましょう。**

**本日私たちに与えられています聖書箇所の前の箇所である35節にはこのように書かれてあります。**

**「しかし、パウロとバルナバはアンティオキアにとどまって教え、他の多くの人と一緒に主の言葉の福音を告げ知らせた。」**

**エルサレム教会から託された手紙と共にアンティオキア教会に戻ってきたパウロとバルナバは、アンティオキア教会に留まって伝道の業に励みました。その伝道の業を行った数日後にまるで思いついたかのようにパウロはバルナバに提案をします。それは第一次伝道旅行で行った町に行き、その町にできた教会を訪問して兄弟姉妹の群れがきちんと信仰に留まっているかどうかを見に行こうというのです。生まれたばかりの教会の牧会に行こうというのです。バルナバは賛成しました。そして、その旅行にマルコと呼ばれるヨハネも連れて行こうと提案しました。しかし、パウロは大反対。伝道旅行を途中で投げ出すようなやつは一緒に連れて行くべきではないと考えたのです。**

**13：13に「パウロとその一行は、パフォスから船出してパンフィリア州のペルゲに来たが、ヨハネは一行と別れてエルサレムに帰ってしまった。」と書かれてあります。この時ヨハネ・マルコがなぜ伝道旅行を投げ出して途中で帰ってしまったのかははっきりとはわかりません。しかし、伝道旅行のあまりの過酷さに若いマルコは嫌気がさして生まれ故郷に帰った、いわば伝道者として失敗と挫折をしてしまったのではないかと考えられています。**

**パウロはあんな大失敗をした者は役に立たん、使い物にならん、伝道者失格だと厳しく突っぱねました。しかし、バルナバはマルコが自分のいとこという可愛さもあるのでしょう、若い者は失敗して学ぶんだ。たった一度の失敗で失格なんて判断してはいけない。もう一回彼にチャンスを与えてやってくれてもいいじゃないか。**

**そんなやりとりがあったかどうかはわかりませんが、パウロとバルナバはマルコを連れて行くかどうかを巡って「意見が激しく衝突し」ます。39節で「意見が激しく衝突する」と訳されている言葉の元の言葉は「激昂（げきこう）した」です。お互いに激しく怒って興奮するのです。お互いに顔を真っ赤にして怒鳴り合うのです。パウロは激しい性格ですから激昂するのもわかるのですが、あの「慰めの子」と呼ばれるほど温厚で人望の厚いバルナバが激昂するなんてよほどのことです。バルナバはそれほどまでにマルコにもう一度チャンスを与えてあげたかったのでしょう。失敗と挫折に終わったマルコにとっての第一次伝道旅行です。自分は伝道者としてふさわしくないと打ちひしがれていたのかもしれません。そんなマルコを伝道者として育て主に仕える喜びをもう一度味わってほしいと思ったのでしょう。でも、その気持ちがパウロには伝わらない。だからこそ、バルナバはこんなにも激しく怒って、ついにはパウロと袂を分かつことになりました。**

**バルナバはマルコを連れてバルナバの生まれ故郷であるキプロス島に向けて船出したのです。「こっそり」船出したと訳している聖書学者もいます。まるで大喧嘩したパウロから、さらにはアンティオキア教会から逃げるようにバルナバはマルコを連れてこっそりと船出しました。**

**一方、パウロはエルサレム教会から一緒に来た伝道者シラスを新しいパートナーに選んで、アンティオキア教会の信徒たちから主の恵みに委ねられて第二次伝道旅行に出発しました。彼らは陸路で第一次伝道旅行で行き、そこに教会を立てたデルべに向かい、その途中の教会も御言葉によって力づけたのです。**

1.

**パウロとシラスをアンティオキア教会は主の恵みに委ねて送り出したけれども、バルナバとマルコは主の恵みに委ねて送り出さなかった。バルナバたちは逃げるかのように船でキプロス島に向かって旅立ったということを考えると、アンティオキア教会はパウロを支持して伝道旅行に送り出したけれども、バルナバは支持しなかったということです。**

**そう考えると、バルナバはどうだったのか。彼の取った行動がはたして正しかったのか。それこそバルナバはいとこであり肉親であるマルコの可愛さから失敗をしてしまったのではないか。神に仕える伝道者として間違った判断をしてしまったのではないかと私たちは思ってしまいます。**

**バルナバがキプロス島に向かって船出してこの後どうなったのかは聖書には記されていません。ですから想像の域を出ないのかもしれませんが、そこまでしてもう一度マルコにチャンスを与える、御言葉を宣べ伝え、伝道者として主にお仕えする喜びをもう一度彼に味わわせたかったバルナバの気持ちを考えますと、おそらくはキプロス島で共に伝道に励んだのでしょう。共に第一次伝道旅行でキプロス島の中で伝道して教会を立てたサラミスとパフォスの教会を再度訪れて主の十字架と復活の福音を宣べ伝えたのでしょう。そのキプロス島での伝道の旅においてマルコは伝道者として大きく成長したのでしょう。最初の伝道旅行で失敗し挫折して逃げ出したマルコが、バルナバの暖かく優しい時に厳しい愛に満ちた指導のもとで失敗を繰り返しながらも成長を遂げたと思われるのです。**

**後にパウロとマルコは和解をしたと言われています。今日のところではマルコのことを「役に立たない」と言っていたパウロですが、そのパウロが書いたテモテへの手紙Ⅱ4：11（395頁）にはこのように書かれてあります。**

**「ルカだけがわたしのところにいます。マルコを連れて来てください。彼はわたしの務めをよく助けてくれるからです。」**

**最近出版された聖書協会共同訳聖書では「ルカだけが私のところにいます。マルコを連**

**れて、一緒に来てください。彼は、私の務めのために役に立つからです。」と訳されています。第二次伝道旅行を開始する時にはマルコのことを「あんな奴は役に立たない。伝道者失格だ」と厳しく切り捨てたパウロでしたが、その何年か後には「マルコは私の務めのために役に立つから連れてきてください」と言っています。大きな失敗をしたマルコがパウロに認められるような伝道者に成長したのです。**

**さらには、このマルコが後にマルコによる福音書を記したと言われています。若き伝道者**

**として逃げ出して失敗をし大きな挫折をしたマルコです。そのマルコがパウロに認められるだけでなく福音書を記すようになるまで神様は決してマルコのことを見捨てることなく、しっかりとマルコのことを捕らえていてくださり、伝道者として大きく用いられたのです。**

**ですから、バルナバがこの時に下した判断は人の情から下した判断で、一見すると正しく**

**ない失敗の判断に思えるかもしれません。しかし、神様はそのバルナバをマルコを育てるために豊かに用いて下さったのです。マルコの良き指導者として豊かに用いて下さったのです。**

**「失敗者が用いられる」考えてみますと聖書に出てくる人は失敗した人ばかりです。今日の旧約聖書は神様がモーセをイスラエルの民をエジプトでの奴隷状態から救い出す指導者として召し出される言葉です。神様はモーセを召し出すと言われているのに、モーセは「エジプト人は私の言うことを聞かないでしょう。私の行うしるしを信じないでしょう。私は口が重いのです。誰かほかの人を・・・」とあれこれ言い訳して、ついに神様に怒られる個所です。「わたしはあなたの口と共にある」あなたを召し出したのはこの私なのだ。私はあなたと共にいるのだ。「私が召しだしたのはモーセあなたなのだ」どこまでも神様はモーセを用いようとされるのです。このモーセも若い時に正義感からエジプト人を打ち殺してしまってミディアンの地に逃げなければなりませんでした。モーセも大きな失敗をしたのです。神様はその大きな失敗をしたモーセを豊かに用いられたのです。**

**モーセだけではありません。ダビデ王も部下の妻を奪ってしまったという大きな失敗をしました。**

**イエス様の弟子たちはイエス様が捕らえられ十字架につかられる時に全員がイエス様を見捨てて逃げてしまいました。ペトロは「イエス様のことを知らない」と鶏が鳴く前に3度言ってイエス様を裏切りました。そんな大きな取り返しのつかない失敗をしたペトロを弟子たちをイエス様は愛して下さり、「わたしの羊を飼いなさい」と再び弟子として召し出して下さり、その弟子たちに聖霊を送って下さったのです。そして教会が誕生したのです。**

**ですから、教会というのは失敗者の集まりです。一つの失敗もしない完璧な人間だから神様は愛して下さるというのではなくて、大きな失敗をした者が愛されてイエス様の弟子としてイエス様の十字架と復活の愛を宣べ伝える者として用いられているその喜びを証しをするのです。**

**聖書に記されているのは失敗者ばかりなのです。教会は失敗者の集まりなのです。そう考えると、私たちは失敗ばかりする私たちを私は役に立たないと思う必要はないのです。失敗ばかりするこんな私をも神様は愛して下さり、こんな私を豊かに用いて下さるのです。失敗もまた神の恵みです。私の失敗をも神様は用いて下さり、私たちが思いもかけない最善の方向に導いて下さるのです。だからこそ私たちは人の失敗に目くじらを立てるのではなくて、失敗ばかりするこんな私を愛して下さり思いもかけず豊かに用いて下さっている神様の愛に感謝して謙遜を持って歩んでいきたいと思います。**